

6 木管楽器～Oboe族

【Oboe について】

《楽器の構造》

Oboeは、吹口（Mouth Piece）側が閉管になっている円すい管である（わずかだがBell側がひろい）。管胴は黒檀、エボナイト（Ebonite）などの材質で、全長は約70cm、全体は次の四つの部分でできている。

Reed…二枚のReedが差し込んである吹口部分

Top Joint, Bottom Joint…多くの音孔がある本体部

Bell…朝顔型の管端

楽器には紐がついており、奏者はこれを首にかけて支え演奏する。

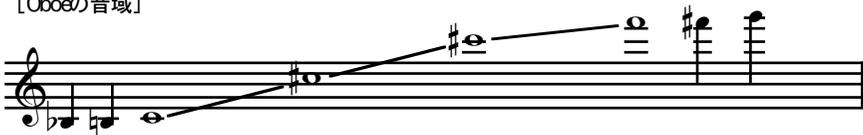
《発音原理と音域》

「Double-Reed」楽器であるOboeには、葦からつくられた二枚の曲面のReedが両凸レンズのように向き合い、細い金属管に取り付けられている。二枚のReedの隙間に吹気が送られ、そこで起こる振動が管内に伝わり、空気柱とReedの相互作用により振動が増幅していく。

Oboeを鳴らすには強い息の圧力が必要なので、吹く前に多量の息を吸う。しかしReedに吹き込まれる息は少量なので、残りの空気は肺に残されることになる。ここに他の吹奏楽器と異なるOboe独特の演奏上の疲労がうまれる。（第3章《吹奏について～Embouchure》の項参照）

円すい管（閉管）であるOboeの共鳴は、周波数比で1－2－3－4…の整数倍で起こる。最初の倍音は開管の円筒管であるFluteと同じく、1オクターブ上に現われる。そして、Fluteとほぼ同じ高さの基底音が出る。

[Oboeの音域]



《音色について》

重簧楽器の発音様式は我々の声帯に似ているので、人声に最も近い楽器であると言われる。音響学的には、木管楽器中もっとも豊かな部分音を持つ（Violinに近い）。しかも、演奏音域にかかわらず固定した周波数の部分音をもつ。これが「Oboeらしさ」を決定している

その音色を、伊福部は「人声と同じく、短調の楽句は物淋しさと悲愴な感を興え、長調にあつては、その情緒は際立って明るくなるものである」と表現している。

Oboeは、オーケストラの木管楽器の中でも際立った音色である（豊かな部分音をもつ）ため、実際の音の強さ以上に他より抜き出て聴こえることが多い。このため、殊に独奏的役割が得意である。

Beethoven : Symphony No.3 / 2nd Movement

Oboe Solo

Adagio assai

p

cresc.

decresc.

p

しかしそれはまた、Oboeが他の木管楽器より運動能力においていささか劣る反面でもある。この楽器は本質的に旋律（Legatoの）楽器であるので、FluteやClarinetほどの運動能力はないからである。

Respighi : "Pini di ROMA"

2 Oboe

Più vivo

ff

dim.

ff

ただし、大きな跳躍をとまなわないStaccatoのニュアンスは、際立って印象的である。

《各音域の特徴》

- 低音域…この楽器の祖先を思い出させるきわめて重簧的な、少し荒い音色である。
- 中音域…もっとも豊かなニュアンスを表現できる。
- 高音域…徐々に、少し刺激的な音色に変わっていく。

《Oboeの奏法について》

- Tonguing…Oboeは発音時、舌とReedが接触しているので、Tonguingには制限がある。Single-Tonguingが原則であり、楽句によってはDouble, Triple-Tonguingも用いられることもある。ただし「無理すると舌が切れる」ともいわれる。
- Vibrato…Fluteと同様にVibratoが可能である。
- 重音奏法…きわめて特殊な奏法だが、この楽器は重音が出せる。

【楽器の歴史】

重簧楽器の歴史は古代の中東・ヨーロッパにさかのぼる。Oboe以前の重簧楽器は、ショーム（Shawm）と呼ばれ、世界中に分布している。雅楽で用いられる篳篥（ひちりき）も典型的な重簧楽器だが、これがどのように東アジアに広まったかは、明らかになっていない。

【Oboe族の派生楽器】

《English HornとOboe d'Amoreのこと》

標準のOboeより完全5度低い音を出すEnglish Hornと、短3度低いOboe d'Amoreがある。English Horn、Oboe d'Amoreともに、標準のOboeにない球形の朝顔（Bell）をもっている。English HornはF管、Oboe d'Amoreは

6 木管楽器～Oboe族

A管の移調楽器である。

[English Hornの音域] [Oboedamoreの音域]

記音

実音

《記譜法》

上の譜表の通り、English Hornは完全5度高く、Oboe d'Amoreは短3度高く、共に調号を使って記譜する。

《English Hornの用例》

English Hornは、Oboeにも増して哀愁を帯びた音色が印象的で、多くのオーケストラ曲中にこの楽器のための美しい旋律が残されている。

次の旋律は、English Hornの名旋律としてあまりに名高い。

Dvorák : Symphony No.9 / 2nd Movement

English Horn Solo

Largo

p

p

また次の曲では、English Hornが息の長い素晴らしい旋律を、Solo Pianoのアラベスクを背景に歌い続ける。

Ravel : Concerto pour piano et orchestre

English Horn Solo

Adagio assai

p
espressivo

p